



HAL
open science

場面に応じた柔軟性

Michiko Nagata

► **To cite this version:**

Michiko Nagata. 場面に応じた柔軟性. [Research Report] Katholieke Universiteit Leuven; Université Stendhal - Grenoble III. 2011. <hal-02568439>

HAL Id: hal-02568439

<https://hal.science/hal-02568439>

Submitted on 9 May 2020

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

場面に応じた柔軟性 (永田)

B 1 レベルにおける柔軟性とは何か、記述文からどう定義したらいいのか解釈が難しかった。また日仏英語間で、記述文の内容が異なる例があった。例えばB 1 +の記述文には、「型通りの表現をあまり多用せず」とあるが、英語、フランス語版にはこういった表記はない。この日本語版にだけ付け加えられた「型通りの表現」とはどういう表現を指すのだろうか。また、B 1 の記述文に、「述べたいことを**多く**表現」とあり、これは英語版の「to express much of what he/she wants.」の翻訳と思われるが、フランス語版は「afin d'exprimer l'essentiel de ce qu'il/elle veut dire.」とあり、英語版は発話の「量」を、フランス語版は「質」を重視しているという相違がある。

B 1 の記述文を参照し柔軟性とは、習った事をその場に応じて使える能力、また語彙や表現の多様性であると定義した。また以下の2点に対する柔軟性を観察のポイントとした。

- 1) 場に対する柔軟性
- 2) 聞き手への柔軟性

また、柔軟性がCEFRにある方略や、叙述の正確さの記述文にもに関連が強い事が、観察を通してよく見られたことから、それらも注意点とした。

例1 【営業日、時間に関する質問】 フランス人学習者=M、日本人学生=J

1	→	J	えっと::(1)さっき:(1)えっと::(:)日曜だとか::(:)あと夜中まで:店が開いてる(0.2)のは
2			(0.5)日本で開いてるっていうのはすごい便利だと:(0.4)と:(0.7)言っていましたけれど::
3			(1)フランスで::(0.4)もし日曜:だとか:夜遅くまで:(1.7)店があいていたらどうおもいますか
4			
5		M	うーんまあ(1.3)フランスには:(1.1)うーん(0.8)今は(1.1)まあ(0.4)あもう(0.7)店員は(1)
6			あー(0.3)まあ(:)う(0.7)社会(0.6)社会は(0.6)そのその社会問題が(:)ありますね(0.6)あの一
7	→		(1)日曜日が店を日曜日に(0.58)あくとか(2)あー僕の意見では:(0.4)ん:::(1.51)まあ
8			よく:::(0.2)は(0.2)よくよくわかりませんが(0.2)んー(0.6)もう少し(:)おそく(:)まで(1.5)
9			あけ(0.2)あ:(:)あい(0.2)あー(4.1)もうおそくまで(1.1)あ:(0.4)あいたら(1)だ:(:)あ:(2.7)
10			いいだと思います=
11			

1-1. マーク (M) が「日本ではスーパーなど、店の営業時間が長くフランスと違って便利だ」と発表したことに対して、日本人学生 (J) から質問がでる。意見を問う質問で、Mにとって難しい場面である。1-7. その質問に対しMは、言葉につまりながらも、社会問題と関連付けて導入をし、後半は「僕の意見では」と強調し、自分の考えを伝えようとしている。プレゼンテーションの質疑応答という場において、より説得力のある発言を目指していることがうかがえる。B 1 の柔軟性に関して「述べたいことを多く表現できる」、もしくはフランス語版の「述べたい事の本質を表現できる」よう努めているのが観察できるのではないだろうか。また、叙述の正確さのB 1 の記述文にある「自分が最も大切だと思う点を、聞き手が理解できるような形で表現することができる」はMの特徴をよく表している。

例2【日曜日の営業についての質問】

1		J	=日曜日は=
2	→	M	日曜日は(0.4)日曜日は:(0.7)店によって(1)あの店によって(0.9)あつ(0.3)あ(.)あー(1.6)
3			店によって(0.3)あいたほうがいい(0.7)例えば(0.7)えー:::(0.5)食べ物の店とか:(0.5)レスト
4			ランとか(0.7)まもちろんレストランはあいてるけど(1.8)あー:::(.)食べ物の店や:(2)そ
5			それは(0.5)いいだと思いますけど:(0.5)えー:::(1.6)えー(1.9)反対に(0.5)服の店や:::(0.9)あー
6			(1.5)銀行とか:(1.1)それは(0.3)日曜日に(0.4)あく必要は(0.3)ないと思います(2.9)それは
7			店によって(1.7)よります(3.9)
8			
9			
10		M	うーん(0.8)いいと思います(1.6)便利

2-2. タ形+ほうがいいという既習事項を、運用しようとしている。自動詞の開く^あの使い方は学習者にとって難しいが、その自覚があるのか慎重に言い直しつつ発言している。習得した事を引き出そうと、モニタリングしているようだ。また、食べ物の店、服の店、という易しい言葉を使っている。ここで観察される点は、CEFR 4章にある産出的言語活動の方略の記述文にもみることができる。柔軟性はストラテジーと関わりがある事が観察される。2-4 自問しているせいか普通体に切り替えているが、B 1+になると、聴衆を意識して丁寧さにおいても「表現を順応させることができる」ようになるのではないか。2-3. また、Mは具体例を多く挙げている。これは、聞き手にわかりやすいようにという配慮であると言えるのではないか。

例3【広島】フランス人学習者=V, 日本人インタビュアー=I

1		I	どこが一番印象的でしたか
2	→	V	う::んそ:::うですねえ((腕を組む)) (3.7) 広島はとても(.) あの(.) °なんていうかな°
3			(1.2) あの あの 広島のれきしとかは(.) フランス(.) で(.) まあ日本の歴(.) で勉強して
4			(.) それでほんとに町に行くことが(3.7)まああの気持ちがほんとになんていうんで
5			すか(.) まあ変な気持ち?:::けっこうあの重い:::気持ちでした=

日本での旅行で、どの街が一番印象的だったかという質問に、3-2. Vは、広島で感じたことを「変な気持ち」「重い気持ち」と、表現している。記述文にある「簡単な言語を幅広く柔軟に使って」に当たるのではないか。また、3-4. 「ほんとに、なんていうんですか」は、インタビュアーから視線を外し、小声で自問しているのも、丁寧さを排除し「ほんとに、なんていうのか」と普通体に変換しなければいけない所である。こういう点に注意が向くと、B 1+にあるよう場に表現を順応させることができるようになるのだろうか。

例4【修学旅行】

1		I	=学校で旅行に行くんですけど泊まりにね で小学校のとき修学旅行で始めて広島に
2			行ったんです
3		V	huhum
4		I	で広島原爆ドームにじゅう:に歳の時かな
5		V	=12歳

6		I	そう小さいよね [hhh((笑))
7		V	[小さい()hhh((笑))
8 9		I	クラス全員でももちろんその学校でも勉強してそれから行ったんですけど まあすごくショックを受けましたよねそれで [::
10 11	→	V	[ま特に子供に(.)原爆ドームは(.)たぶんちょっと(.)きびしい:: あ たぶんちょっときびしい:: [っていうか

Vは、インタビューアの修学旅行の経験談に対して、4-10. 適した言葉を探しつつ、躊躇しながら表現している。「っていうか」で不確かながら、こんな風に言えるのではないかという表現に、その多様性が観察される。B 1 +のいう「難しい場面にさえ、、、表現を順応させることができる」に相当するのではないか。原爆という難しい話題に表現を合わせようとしている事が観察される。

指導ポイント

柔軟性について、タスクの目標事項として、場面や聞き手に適した表現とは何かを学習者に意識させることが、大切ではないだろうか。プレゼンテーションや、インタビューといった形式のタスクでは、教師からのフィードバックが難しいが、CEFRが推奨する自律学習のツール「European Langage Portfolio」などを参照し、学習者自身のタスク達成度の自己評価時に、教師がフィードバックをするという方法が考えられるのではないか